

メンバー手記(2)

村上 和彦

この夏、私の後輩、有村正君が剣岳に逝った。

私が3年生当時最も山に通っていた頃、有村君とはその多くを共にした。

日高の沢、八ヶ岳のカモシカ山行、秋合宿の五竜岳、中央アルプス、そして夏の剣。

彼は誰よりも多くトレーニングに励み、努力をした。時には、当時主将だった私の方針と行き違うこともあったが、山に大きな情熱を傾けていたことは周りの誰もが認めていた。

彼の最後の山行となった剣岳も同行していた。あの8月2日のことを思い出して、文章にするのはとても辛い、それを行なうのが残った者の義務であろう。

以下に、私の記録と反省を記す。

山行まで

5月半ば過ぎのことだったと思う。有村と栗原がこの夏、剣岳に行くという計画をミーティングで知った。有村に尋ねると、Dフェース・チンネに行く予定だという。私は「やっぱり、行くのか」と思った。昨年の剣の夏合宿が二人にとっては不満の残る内容であったことと、その後秋以降の、二人の山行歴を考えれば、4年の夏に、剣でもう一度思い切り岩登りをしたいと有村と栗原が願うのは当然のことだった。

同様に、私も剣に行きたいと思った。私にとっても今年の夏は学生最後の夏である。剣には過去3回行っている。有村達に比べれば最近岩から遠ざかっているが、山行までに体調をベストにもっていけばDフェースに登れる自信はあった。何より「もう一度」剣に行きたかった。

有村に「俺も行きたい」というと、別に構わないが、その場合もう一人メンバーがいないと困る、という返事が返ってきた。それも当然のことなので、2年生の喜多山を誘うことにした。

こうして剣岳へ行くメンバーは決まったのだが、6月に入って、4人でトレーニングをしたり、打合わせをしたりすることはなかった。各々トレーニングを自分のペースで行っていたし、有村・栗原ともその面では信頼していた。私自身は就職活動の関係で6月中は片手間にしかトレーニングできなかったが、7月に入って集中的にトレーニングを行ない、下旬までにはどうにか3年生当時の体調に戻すことができた。

7月27日に宇都宮郊外の古賀志山ゲレンデで、有村・栗原と練習を行なった。3人とも体調は上々だった。

7月29日

私は、就職活動のため昼間東京へ出て、一旦筑波に戻ってから再び集合場所のJR上野駅へ向かうため、有村にはあらかじめ上野着が21時頃になると伝えておいた。もし間に合わない時は特

急列車で追いかけるから先に出発してくれ、とも伝えておいたのだが、20時50分には上野駅に到着できた。

3人ともすでに揃っていた。有村は「間に合わないと思った」と笑っていた。一人で大急ぎの食事をして、21時26分発の越前82号に乗り込んだ。

いつものことながら、臨時列車は空いている。我々の乗った車両には、他に10名程の登山パーティーがいるだけで、一人1 Box を優に占拠できた。缶ビールを飲んで各自眠りについたが、どうも目がさえて高崎あたりまで眠れなかった。冷房が強過ぎて寒いため、皆トレーナー等を着込んだ。それでも軽井沢を過ぎたあたりで眠ることができた。

7月30日

魚津あたりで目がさめた。夜行列車で迎える朝は、私はあまり好きではない。頭はボーッとするし、体は重い。それでも周りを見ると、車窓から立山連峰が見渡せる。「来たな〜」という感じだった。他の皆も目をさましてきた。皆良く眠れたようだ。

5時55分、富山駅着。JRの改札を抜けて富山地方鉄道の乗りばへ向かう。結構人が多い。売店でパンを買い、電車に乗り込む。6時19分富山駅発。満席のため扉の脇にザックを置いて、立ったままパンをかじった。

7時9分立山駅着。ケーブルカー乗りばは混雑していて、整理券を配っている。7時30分立山駅発。ケーブルカーは満員である。我々は車両の最前部に立っていた。テープで流れる観光案内もすっかり耳馴染みになっている。

7時37分美女平着。すぐにバスに乗り込んだ。良い天気である。最後部に座って、ガイドを聴いていた。

8時40分室堂着。相変らず「観光地」である。ターミナルの屋上で、登山靴にはきかえるなど準備をした。風もなく、快適なコンディションである。私は昼食用のパンを売店で買った。それぞれトイレに行ってきて9時30分出発。「観光客用」石畳の上を歩く。周りは家族づれやその他でいっぱいである。石畳を歩くと、自分達が風景の一部になったようで、何となく可笑しくなった。

10時雷鳥沢幕営場の脇の沢で、小休止。有村が、ここから剣御前まで一本で行く、と笑顔で言う。私は体調も良いし、ザックもさほど重くないので「うん、楽勝だ」と相槌を打った。

栗原先頭で登り始めた。さほど速くもないが、まあまあペース。「今日は、熊ノ岩まではしんどいな」などと考えながら歩いていた。30分程歩くと、二番目を歩いている喜多山が栗原から少しずつ遅れ出した。喜多山は、四月にゲレンデで5m程滑落して足首を捻挫して、しばらくトレーニングを積んでいなかったため、若干調整不足のようであった。

栗原は、先へ先へと登っていった。休みたそうな喜多山に、有村とハッパをかけて栗原の後を追った。11時に剣御前に到着した。栗原は一足先に到着していた。

小屋の前にザックを置いて小休止。剣岳の威容が眼前に現われる。時折吹く風が少し冷たいが、気分は良い。粉ジュースを作って飲む。10分程休んで出発。有村と喜多山がパッキングをしている間に先に歩き始める。栗原は別山乗越直下の雪渓を伝って降りて行ったが、私は短パンだったこともあり、登山道を下った。

剣沢幕営場の手前で栗原と合流し、テント場を通過して、山岳警備隊詰所脇のボウルダーの所まで行き、そこで有村達を待つことにした。

「今日はやっぱり、熊ノ岩は無理だな」

「それなら、真砂でも此处でも同じだ」

栗原と話しつつ、ボウルダーをよじ登って遊んでいた。

やがて有村達が来た。有村も、熊ノ岩まで行く気はないと言う。そうすると翌日熊ノ岩までの行程は、真砂沢からでも剣沢からでも時間的にはさほど変わらない。天気も良いし、こういう午後には、沢沿いで展望のきかない真砂沢よりも、明るく開放的な剣沢でくつろいだ方が良い。皆、剣沢で幕営したいという気持ちを抱いたが、台風が近づいているため、やはり真砂まで降りた方が良さだろうということになった。

いつもながらテント場から剣沢雪渓への下降路は、幾本もの道が複雑に通っていてわかりづらい。歩きながら、やっぱり早朝にここを下るよりは、今日の昼間下って正解だと思った。

雪渓の脇まで降りてくると、空気はひんやりして涼しい。ピッケルを出して雪渓の上に乗る。雪渓を下降するのは最初のうちこそ気持ちいいが、そのうち足もとは疲れてくるし、転倒すれば、雪は汚れているので泥だらけになるしで、だんだんイライラしてくる。有村の靴はビブラムではないので歩きづらそうだ。また喜多山は、冬山の経験はあるが、夏の雪渓歩きは初めてなので、やはり少し手間どっている。

それでも順調に平蔵谷・長次郎谷を横目に下降して、13時に真砂沢ロッジに到着した。20張位のテントがあった。

一休みしてからテントを張って、表でお茶を飲んでくつろいだ。缶ビールを少しだけ冷やして飲んだが、栗原が持参したウイスキーの瓶を割ってしまったのには一同ショックを受けた。喜多山は昼寝をしていた。

陽が翳って来たのでテントに入り、夕食の準備。と言っても、私はテントの一番奥で横になっているだけだ。2年生の喜多山がせっせと働いている。気象係の栗原は天気図を取ろうとしたが、谷間であるうえに、ラジオの調子が今ひとつのため良く聴き取れず、小屋にかけあってテレビの天気予報を見せてもらうことにした。

夕食後、私以外の3名は小屋へ天気予報を見に行った。どうやら台風の進路ははずれたが、天候はあまり良くなさそうである。明日は熊ノ岩までベースを上げ、Cフェース・Aフェースを登ってしまいたい。なんとか天気はもって欲しい。ザイルパートナーをジャンケンで決め、有村と喜多山、栗原と私ということになった。

酒が、私が持参したウイスキーの小瓶だけになってしまったので、夜を持て余してしまう。することもないので、7時には早々に寝支度を始める。私は今回シュラフカバーのみであるので、若干防寒に不安が残ったが、前夜が夜行だったこともあり、すぐに眠りにつくことができた。

7月31日

午前3時に起床。皆、良く眠れたようである。表を覗くと、雨が降っていないものの、曇り空であまり天気は良くない。登っている途中で降り出してきそうな気がして、何となくペースを上げるのは気が進まなかった。しかし有村が、今日中に熊ノ岩まで上げないと、日程的にチンネは無理になってしまうので登ってしまいたい、ということなので朝食後、テントを撤収してパッキング、5時に真砂沢ロッジを出発した。ロッジに幕営していたパーティーの内、我々は3番目位に出発した。

長次郎谷の出合までは、昨日下りて来た剣沢雪渓を30分程登り返す。まだ薄暗いのと体が完全に目覚めてないため、気分はあまり乗らないが、そのうち体も暖まってきた。やがて出合に迫りつき小休止。長次郎谷の雪渓の状態は例年よりも良く、クレバスもまだ無いようである。5人程のパーティーが先に登っている。再び歩き出して、いよいよ長次郎谷雪渓の登りである。熊ノ岩までの先の長さを考え、いささかうんざりしながら歩いているうちに雨が落ちてきた。「やばいなあ」と思ったが、さほど強い雨でもないので皆平気な顔をして歩いている。喜多山が少し、栗原から遅れだした。雪渓の中腹で雪上訓練をしているパーティーがいる。

やがて雨が段々強くなってきたので、雪渓右岸の岩の上で小休止して雨具を着けた。しかし、喜多山は雨具をザックの下の方に入れてしまったので、そのまま歩くという。また、皆アイゼンを付けるといふ。私は今回、アイゼンを持って来なかったのに、彼らがアイゼンを付ける間に、先に出発させてもらった。雪渓の状態からいって、アイゼンがなくても大丈夫だと思った。

雨の中をマイペースで登っているうち、雨はかなり降ってきて、視界も余りきかなくなってきた。他のパーティーのいくつかは下りていったようだ。

下を見ると、他の3人は50m程離れた所を歩いている。待とうかとも思ったが、3人ともアイゼンを付けているので、そのうち追いつかれるだろうと思い、そのまま歩き続けた。この調子では、熊ノ岩に着くころにはびしょぬれだろう。冷たい・寒い・視界はないと気が滅入る要素しかない。皆と離れているのと、雨の音とで、まるで一人きりで歩いているようだ。

ふと後を振り返ると3人はガスの向こうにかすかに影が見えるだけである。「これはマズイ」と思い、立ち止まってしばらく待っていた。喜多山が、Tシャツのままで寒そうである。10m位に近付いたところで、喜多山に「大丈夫か?」と聞くと大丈夫だと言う。有村に「休むか?」と聞いたら、「休まず行きましょう」と言うので、私は再び歩きだした。

やがて左前方に熊ノ岩が見えてきた。まだ距離はあるが、少し励まされる。上から4人パーティーが下りてきたが、無言のまますれ違っていった。マイペースで歩いていると、また後ろの

3人と距離が開いてきた。どうやら喜多山が遅れているらしい。

あまり距離が開かないように気をつけて歩いているうちに、ようやく熊ノ岩のたもとに来了。幕営地である熊ノ岩の上に出るにはもう少し登って、回り込まなければならない。岩に近付くとラントクルフトがあり、危そうだったので、雪溪中央から右寄りの所を登った。

熊ノ岩の上とほぼ同じ高さまで来たところで、後ろを見ると、だいぶ距離が開いてしまっている。どうやら必死になって登ったため、ペースが速くなってしまったようだ。ガスの中を影が動いている。

「村上さん！」と声がするので「おお！ここまで登って来いよ」と答えた。

3人ともあまり目が良くないので、ガスの中だと私よりもルートファインディングがつかないのだ。そこまで考えなかった私が軽率だった。声を出した方がわかるだろうと「こっちだぞ～」と何度か言った。

しばらく待つと、まず栗原がやって来た。栗原と「もう、びっしょりだぜ」などと話していると、その30m位後から、有村達が現われた。4人揃ったところで雪溪をトラバースして熊ノ岩の上に出た。8時20分。一刻も早くテントに入って火にあたりたいかった。

熊ノ岩にはテントは一張りあった。「こんにちは！」と声をかけると中から「大変ですね」と返事があった。雨の中、皆必死でテントを張る。どうもボールの接続がうまくいかないの、よく見ると、一本接ぎ目の部分が欠けている。前々からよくとれる部分だったので、恐らく真砂沢で撤収する際にとれてしまったのだろう。

ボールが一本少ないので不格好になってしまったが、仕方がないので、とにかくテントの中に入った。

テントの中に入ってしまうと、ボールが足りないことはさして気にならなかった。全身ずぶ濡れたが、ホエーブスに火がつくとようやくひと息つけた。

しばらくの間、じっと火にあたっていた。それから、お茶を入れて飲んだ。今日はこのまま停滞である。退屈な一日となる。ともかく、服を乾かしたい。燃料はたっぷりあるし、有村がキャンピングガスを持ってきたので、テントの中は大乾燥大会となった。テント内の温度が高くなったり、酸欠気味になる度に火を消して換気をした。そうしながらパンを噛ったりお茶を飲んだりしているうちに、服もだいぶ乾いてきたので、皆姿勢を崩して横になったりしてきた。濡れて体が冷えたといっても、冬山程の悲惨さはないので気は楽なものである。

午後になり、ウイスキーをちびちび飲みながら退屈な時間を耐えているうちに、ようやく15時となり、夕食の準備にとりかかる。ラジオも、ここまで登ってくるとどうにか聴き取ることができひと安心。

16時栗原が天気図を取る。どうも明日も天気は良くなさそうである。「明日も停滞はシンドいなあ」と思った。夕食後、就寝の準備。昨夜はシュラフカバーのみでも寒くなかったが、今夜は少しつらいかも知れない。湿った下着を替えて、厚着をした。雨は一向に止みそうにない。夜、

濡れなければ良いがと思いつつシュラフカバーにもぐり込んだ。20時前である。

8月1日

4時ごろ目を覚ました。というより昨夜はやはり、寒さと冷たさで殆ど眠れなかったのである。相変わらずテントには雨のぶつかる音が激しい。これでは駄目である。今日も停滞だ。

上半身を起こして見ると、3人ともまだ寝ている。「くそ〜、こいつら」と思ったが別に無理に起こす必要もないので、そのまま一人でボ〜ッとしていると栗原が目を覚ました。

「雨だな」と言うのと「雨ですね」と答えた。火をたきたいんだけどと言うと、栗原も上体を起こして、キャンピングガスをつけた。雨音を聞きながらしばらく火にあたったが、有村達は起きる気配もないし、燃料の無駄のような気がしたので、火を消して再びシュラフカバーに入った。

7時頃、有村達が起きてホエーブスをたく音で、私も起きた。テントの中は「くそ〜」とか「退屈だ」とかの声で一杯である。朝食のあと、プリンを作ってみても、時間は全然進まない。私は、夜眠れなかった分を取り戻そうと、暖かくなったテントの中で横になった。

眠ったり、お茶を飲んだり、他の3人はゲームをしたりしていると、どうやら雨足もようやく弱くなってきた。時折止んだりしてきた。皆タイミングを見計らって、用を足しに表に出た。午後になって雨はあがりつつあった。

15時ごろに雨は上がり、ガスも次第に晴れてきた。テントの表に出ると、六峰のフェース群が見える。思った以上に近くにあるので、皆驚いた。明日こそ登れそうである。隣のテントのパーティーがAフェースを登ると言って出発した。私たちは時間的に行くべきではないと思い、テントの周囲でのんびりと過ごすことにした。

天気図を見てもどうやら明日は大丈夫そうである。やっと気分が乗ってきて、夕食も明るく食べることができた。昨夜私はテントのはじめで眠れなかったので、今夜は栗原と場所を変わってもらうことにする。20時就寝。

8月2日

3時起床。昨夜はどうか眠ることができた。テントの入口から表を見ると、星が曇がっている。どうやら絶好調の天気である。皆気合十分で起きだした。

本来なら一昨日予定されていた、Cフェース、Aフェースに登攀し、時間的・体力的に余裕があればDフェースまで登ろうということになった。

朝食後、有村・喜多山、栗原・私とそれぞれ持っていく物を分担して、4時30分熊ノ岩を出発。栗原は用を足すため、喜多山は水を汲みに行ったために、出発に若干手遅れ取り、私と有村が先行した。

雪溪をトラバースして、Cフェースの基部を目指す。歩きながら、雪溪からCフェースにうまく乗り移れば良いなと思った。私が先に立って登って行くとCフェースには簡単に移れる。

ホッとしてそのままCフェースの基部に移った。すぐ後から有村が来た。

下を見ると栗原と喜多山は100mほど後ろにいる。ザックを降ろして休んで待つ。天気は良い。剣のピークはもちろん、立山の向こうの北アの峰が見える。絶好の登攀日和だ。

5分程して、栗原が現れた。有村が先に行っても構わないというので、栗原と私が先に登攀することにする。剣稜会ルートの1ピッチ目は、登攀ルートというよりは簡単な段階状の登り道といった感じなので、2ピッチ目からザイルを着けることにして、そのまま歩いて登った。

1ピッチ目の終わりでザイルを出して、アンザイレンした。Cフェースは以前にも3回登ったことがあるが、それほど難しくない所以我も栗原も、登山靴のまま登攀することにした。下を見ると、有村と喜多山がCフェースの基部から1ピッチ目を登って来る。それを尻目に、私がトップでスタートした。

私たちより先には、1パーティーもいない。難易度的には少々物足りないものの、展望も効く快適な、足慣らしとしては絶好のルートである。体調も絶好調である。岩壁稜線の右側を快調に登って行く。まだ余り「岩登り」という感じではない。

2ピッチ目の終了点でアンカーをとり、栗原に声をかける。確保態勢をとって、栗原が登り始めるのを待つ。Dフェース側が見える。パーティーがDフェースに向かって雪渓を詰めて行く。今日自分達も、あそこまで行けるだろうか。何とか行きたい。Cフェース・Aフェースは速攻で登ってしまいたい。そんなことを考えていると栗原の「行きま〜す！」の聲がして、確保の姿勢をとった。

すいすい登って来るので、ザイルを引っ張るのに忙しい。栗原も少々腹の具合が悪いと言っているが、調子は良さそうである。程なく栗原が現われた。

「有村達は？」と聞くと、2ピッチ目の取り付きで準備しているという。栗原がそのままトップで3ピッチ目を登り始めた。相変らず調子良く登っていく。ザイルが残り10mを切ったあたりで確保態勢に入ったらしい。剣稜会ルートの核心は、4ピッチ目の高度感たっぷりのリッジであるが、栗原はまだそこまで行っていないようである。

間もなく「ビレイ解除」の聲がかかり、確保を解いて私が登り始めた。別に問題もなくすいすい登っていける。栗原の確保地点はテラスになっていて、そこからが核心部のようなのである。私がそのままトップで行く。

リッジの右側のフェース状の岩をトラバース気味に登っていくが、このあたりは岩が雪庇状にDフェース側に傾いていて、なかなかリッジの上に出られない。高度感が味わえずつまらないが、しばらく右側を登っているうちに、リッジ上にあるテラスに出た。Dフェースの全容が間近に見える。久留米大ルートに登っているパーティーが見える。ここから先いよいよリッジの上を登れると思ったが、ザイルの残りがあまりないので、ここで確保態勢に入る。

栗原が登って来るのを確保していると、その下に有村が登って来るのが見えた。3ピッチ目を登っているようだ。「ありむら〜！」と声をかけると手を振って答えた。彼も調子は良さそうで

ある。さらに下の長次郎雪渓を、数パーティーが登って来るのが見える。登って来た栗原と、D フェースの富山大ルートを観察する。手強そうだけど、やっぱり登りたいと思った。栗原トップでリッジを登って行く。「気持ちいいですよ」などといいながら核心部を抜けていった。

間もなく「ビレイ解除」の聲がして、今度は私が登る。リッジ上は特にD フェース側の高度感が素晴らしい。背筋をゾクゾクさせながら登って行く。20m 程で核心部を抜けると後は再び稜線の右側を巻き気味に登る。

栗原の確保地点から先は、ピークまで緩やかな登りとなる。大して問題はない所だが、一応スタカットで行くことにする。登攀するというよりはザイルをずるずる引きずって歩く、という感じでC フェースのピークに出た。栗原が登って来るのを待って、7時、C フェースの登攀を終了した。

ピークで小休止した。天気は快晴である。水を飲んで一息つく。

「まあ、こんなものかな」とC フェースについて栗原と話す。有村達が登って来るまでにはまだ30分はかかるだろう。有村達とは、A フェースのピークで合流することになっていたの、先にV・VIの科尔まで降りて、A フェースを登っていることにする。

10分程休んで、下降を開始した。V・VIの科尔までの下降路は、ハッ峰縦走路でもあるが、幾筋も踏跡があるので、うっかりすると三ノ窓雪渓側へ下ってしまう。

下降を初めて直後に三ノ窓側にずれていることに気付き、すぐに戻って下降を続けた。途中A フェースのピーク付近で、有村達がC フェースの最後のピッチを登っているのが見えた。

先程C フェース登攀中に、雪渓を多くのパーティーが登って来るのを見ていたので、この分では今頃はA フェースの取り付きは混雑しているだろうと思った。順番待ちで長いこと待たされるかも知れない。そう考えてずんずん下っていった。

見ると、後の栗原とはだいぶ距離が空いてしまっている。栗原を待つようにしてゆっくり下っていると、どうやらまた三ノ窓側に踏み込んでしまったようである。「これはマズイ」と草付きの斜面をトラバースして本筋に戻った。どうも下りを急ぎすぎたようだ。その地点からV・VIの科尔まではすぐだった。最後にルンゼ状の所をクライムダウンして、8時に立った。

V・VIの科尔から、A フェースの取り付きまではすぐなので、取り付きまで下って休むことにする。取り付きは案の定、人がいっぱいである。しかしその多くは魚津高ルートに登るらしく、私達が登る中大ルートには、登っているパーティーが3つ、待っているパーティーは1つだけだったので、これならそれほど待たずに済みそうだと2人でホッとして、中大ルートの取り付き点の近くにザックを降ろした。

休みながら、12時までにA フェースの登攀を終了してここまで下りて来ればD フェースにもいけるだろう、とか、有村達はC フェースを終わっただろうか、などと話していた。

栗原は登山靴から、クライミングシューズに履き替えている。私はクライミングシューズを持っていないので、今回は普通のジョギングシューズを持ってきた。以前中大ルートに登った時は2

回とも登山靴だったので、今日はどちらで登ろうかと迷った。しかし、3回目の登攀も登山靴では芸がないので、結局ジョギングシューズで登ることにした。また、天候が崩れる心配もないので、ザックは置いて空身で登ることにした。

8時30分、前のパーティーが登って行ったので、私達に取り付く。栗原にとっては2年越しの念願でもあるAフェースなので、トップは栗原が行くことにする。

先程のCフェースよりも、若干緊張する。「それじゃ、行きます」と栗原が登っていく。IV級+のルートだが、栗原はすいすい登って行く。

「さすがクライミングシューズは違うな」などと私と冗談を交わしながらクラック沿いに高度をあげていった。ザイルがあまり残っていないことを伝え、上の確保地点にまだ先のパーティーがいるらしいので、その手前で確保態勢をとるといふ。

「ビレイ解除」の声で確保態勢を解き、私が登り始める。このルートも今回で3度目である。今回はジョギングシューズであるが、普段からゲレンデでも使用している靴なので別に不安はない。剣の岩とは少々相性が悪いようだがあまり気にせず登っていった。

1年生の時のこのルートが、とても難しく感じられたが、今登るとすいすいと快適にに登れてしまう。それだけ自分も上達したのだろうか。

栗原の確保地点に着くと、なるほど窮屈な格好で確保をしている。栗原が、「ここでの確保はしんどいし、トップを入れ替わるにも大変だから俺がまたここから少し登って、そこで確保します」と言った。もっともだと思ったので、栗原のすぐ下のアンカーをとって確保の姿勢をとった。少々窮屈だが、栗原の位置よりは楽だろう。

「OK、ビレイ解除」と言うと、再び栗原がトップで登っていった。中大ルートは実質2ピッチなので私は「めんどうだから上まで行っちゃえよ」と言った。

しばらくすると「ビレイ解除」の声がしたので、確保を解いて私が登り始めた。しばらくは少々手強いがやがて快適なフェースとなった。栗原の地点まで来るともうAフェースの登攀は実質的に終了である。

そこからピークまでは私がトップで登った。最後はあっけなくAフェースの頭に到着した。一応、肩がらみで栗原を確保して、登って来るのを待った。10時登攀終了。

Cフェースにも多くのパーティーが取り付いているのが見える。ザイルを回収しながら、「思ったより難しくなかった」などと感想を洩らした。そして有村達はV・VIのコルに着いたのだろうか、もしかしたらもうAフェースを登っているかもしれないなどと話した。予定ではここで合流することになっていたが、ザックを取り付きに置いて来たので、下で大休止しようということで、下降を始めた。

AフェースのピークからV・VIのコルに下り立った。さらにAフェースの取り付きまで下ったが、有村と喜多山の姿はなかった。

「お
「俺
そん
して
見
パー
気で
てく
こ
残り
靴
れた。
それ
て昼
中大
がら、
を作
私達
有村
まうよ
11時
を履い
めるの
有村
るな」と
言うと、
私と栗
雪溪に出
Cフェ
がら登り
間もな
るだろう
「やっぱ
程がかな

「おかしいな」

「俺達が降りる間に中大ルートに登ったのかもしれない」

そんなことを言いながら、どちらにしてもここで2人で待つことにして、ザックの所で腰を降ろして、パンを食べた。

見るとAフェースはいよいよ混雑してきて総勢20名位が岩に取り付いている。下では4・5パーティーが待っていて、まるで三ッ峠並みである。反対側に目を向けると、相変らずの良い天気で展望も効いているが、下の方ではそろそろガスが出始めてきている。しかし六峰まで上がってくるにはまだしばらくかかりそうである。

ここを12時までに出れば、Dフェースの登攀もできるだろう。体力的にも大丈夫だと思った。残りの日程を考えると何としても今日中に登ってしまいたかった。

靴も脱いでしまい、のんびりとくつろいでいると、11時10分頃ようやく有村と喜多山が現われた。Cフェースからの下降路を間違えて、途中でザイルを出すなどして時間を食ったという。それにしてもちょっと時間がかかってるなと思ったが、いずれにしても4人が揃ったので、改めて昼食にする。

中大ルートの取り付きにはパーティーがいるので、しばらくは空かないだろう。景色を眺めながら、CフェースやAフェースについてああでもないこうでもないと話しながら、粉ジュースを作って飲んだ。

私達が、これからDフェースに行きたいと言うと、有村は別に構わないという。

有村達はこれから中大ルートに登るので、時間的にはきついだろう。自分達だけ先取りしてしまうような形になるが、それ以上にDフェースに行きたい気持ちが強かった。

11時半過ぎに中大ルートが空いたので、有村と喜多山が登攀の準備にかかった。栗原と私も靴を履いてDフェースに向かう準備を始めた。しかし中大ルートの1ピッチ目を喜多山が登り始めるのを待った。

有村が確保の態勢に入り、喜多山が登り出した。思った程苦戦せずに登って行くので「仲々やるな」と思い、栗原とDフェースに向かうことにした。有村に「それじゃ行って来るから」と言うのと、有村は笑ってうなずいた。

私と栗原はピッケルを片手に歩きだした。Aフェースの基部を回り込んで、Cフェースの下の方に出、それをDフェースの基部まで詰めていく。日差しが雪渓に照りつけて、暑い。

Cフェースの直下をまわり込んだあたりから雪渓の傾斜がきつくなってきたが、息を切らしながら登りきり、無事にDフェースの基部に取り付くことができた。

間もなく栗原も現われ、富山大ルートの取り付き点で登攀の準備をした。日陰ということもあるだろうが、取り付き点はひんやりと薄暗くて、それだけでも緊張感が高まる。

「やっぱりDフェースは雰囲気が違う」と言いながら、靴を履き替えた。上を見ると2パーティー程がかなり上部に登っていて、時折小さな石を落としてくる。

トップは栗原である。D フェースは全部で7ピッチだが、1ピッチ・3ピッチ・5ピッチ目がそれぞれ難しい。スタカットで登ると、難しいピッチは全部栗原がトップということになり、少々申し訳ないような気もしたが、栗原が割とやる気一杯だったし、私はジョギングシューズだからという理由を持ちだして「まあ、いいだろう」ということにした。

「行きます」の掛け声とともに栗原が登って行く。いきなり2m程の垂直な岩があって、ホールドも外傾している。「いきなり難しいですよ」と言いながらも乗り越えていった。そこから栗原の姿は見えなくなったが、苦戦しながらもなんとか登っていく様子で、やがて「ビレイ解除」の声がした。

続いて私が登りだしたが、なるほど結構厄介である。岩が少し湿っているせいか、靴もいまひとつしっとりこない。凹角状のところを左上気味に登っていくと栗原の確保地点に着いた。

「結構シンドイな」

「A フェースなんかより全然難しいですよ」

言葉をかわして、私がそのまま2ピッチ目を登る。1ピッチ目よりは楽である。

直上する凹角に沿って登っていくと、頭上に小さなオーバーハングがある。事前に見たルート図では、こんなところにハングなどないはずなので「おかしいな」と思い周囲を見ると、3m程左側にボルトが3本打ってある。少々右にずれて登ってしまったようだ。

ハング下を左にトラバースしなくてはいけないのだが、ツルツルのスラブなので思うようにいかない。邪道だとは思ったが、残置ハーケンにシュリングを通してそれを掴んでトラバースした。ボルトの地点は小さなテラス状になっていてそこが確保地点らしいので、そのままアンカーをとって確保態勢をとった。

やがて栗原が登って来て、そのまま3ピッチ目に取りかかった。この3ピッチ目のラストが垂壁になっていて、この富山大ルートの核心である。私の地点からは20m位だろうか。下から見上げても、かなり難しそうである。

垂壁の下まで栗原は登って行った。途中、長次郎雪溪に熊ノ岩の上の方から落石があったが、雪溪にいた人達はあわてて六峰側に逃げていき無事だった。D フェースの上から眺めて「やっぱり落石はこわいな」と思った。栗原もしばらく眺めていたが、再び登攀を再開して垂壁に取り付いた。

「ちょっとこれは、きついですね」と言って、かなり苦戦しているようである。傾斜がきつい上に、高度感もかなりあるのだろう。

「ハーケンを使って吊り上げて登れよ」と言うと、栗原は残置ハーケンを使って吊り上げを試みたが、その時点でシュリング・カラビナの残りが少なくなっていたので、そのまま突破するのは困難だった。

私が栗原の所まで登って、シュリング・カラビナを栗原に渡すことにした。栗原が安定した所までクライムダウンして確保の態勢に入るのを待って、私が登り始めた。栗原の所まで登ってか

らシュリング・カラビナを渡して、今度は私が確保の姿勢をとった。

「しっかり確保するから思い切っていけよ」と言った。栗原は再び垂壁に取り付いて、吊り上げ気味ながらも突破した。垂壁の上はテラスになっているので、栗原はそこで確保するという。

今度は私が垂壁を登る番である。ホールドが外傾していて、岩もハング気味である。「ザイルを張っていてくれ」と栗原に言って、残置ハーケンを掴んで強引に突破した。

テラスに出ると栗原と顔を見合わせて、

「きついなー、よくトップであんなとこ登ったな」というと、

「ちょっと疲れましたよ」というので、一息つくことにした。

谷の底の方からガスがどんどん登って来て、遠くの山から段々見えなくなってくる。五峰の上をガスが流れている。

「もうそんなに難しい所はないな」

「この上にリッジがあるけど今の垂壁ほどじゃないでしょう」

そう話して再び登り始めることにした。

今度は私がトップである。左上に上昇気味のバンドに沿って登っていくと、リッジに出た。予定では次のピッチのはずであるが、ザイルもまだあるし、1ヶ所位難しい箇所を登らないと栗原に悪いと思ったので「リッジに出たけどこのまま登るぞ」と言ってそのまま登ることにした。

登り出すと思っていたより難しくなく、むしろ快適なリッジ登攀だった。リッジの上部で確保態勢をとった。

ここからDフェースのピークまではもう困難な所はない。傾斜もかなり緩んできた。栗原が登ってきて「全然難しくくないですね」と言って、そのまま登っていった。

ハイマツ混じりのところを、稜線の右側を登っていく。どういふこともなく1ピッチ登って、次のピッチは私が先に登る。いいかげんこれでピークに出るかなと思ったが、だらだらとなかなか着かない。

ピークまでザイルが足りないので確保をとって栗原を待つ。栗原が来て、もういいだろうということで、そこからピークまではコンティニューアスで歩いた。15時30分、Dフェース登攀終了。

ピークで栗原と握手をして完登を祝った。ザイルを回収して一休みした。

「早くテントに帰ってゼリーを食べたいな」

「有村達はもう戻っているだろう」

そう話して熊ノ岩の上の私達のテントを見ると、まだ帰っている様子がない。

「なにをしているんだろう」

「別のルートでも登っているんだろう」

私達は有村と喜多山はAフェースの中大ルートを登った後、恐らくDフェースには来ないだろうと思っていた。

実際、二人が私達の後からDフェースに取り付く姿は見えていない。多分魚津高ルートでも登っ

た後、A フェースの取り付きでゆっくり休んでいるのだろう。私はそう考えていた。少し休んだだけで、すぐり下降を開始した。

だいぶガスが上がってきていたが、視界が効かないという訳ではないので順調に下って行った。C フェースを過ぎたあたりで後ろを歩く栗原と間があいてしまったが、そのまま下降を続けて、V・VIの科尔に着いた。栗原はまだだいぶ上の方にいるので、先にA フェースの取り付きに向かった。

A フェースの取り付きに近付くと、騒然とした雰囲気である。前方の小雪溪の先に20人位の人だかりができています。近くの人に「どうしたんですか」と尋ねると「落ちたんだ、仲間がD フェースに行ってるって行ってたけど、お宅のパーティーじゃないの」と言う。

「まさか!」と思って、人だかりの方へ急ぐと、喜多山がトランシーバーを持っているのが見えた。有村の姿を捜したが、いない。有村が落ちたのだろうか?

「そんなことはないよな。そんなことあるはずがない」

自分にそう言い聞かせながら50m 位まで近づいて「喜多山!」と声をかけると私に気付いて「村上さん!」と叫んで、こちらに来た。かなり興奮している。

「有村か?」と尋ねるとうなずいた。

「有村さんが頭から落ちたんです」

「それで大丈夫なのか?」

「危ないです。もう心臓が止まっちゃって人工呼吸をしてもらっています」

「そうか」私もだいぶ興奮していた。

「どこで落ちたんだ?」

「魚津高です」

「ランニングを取ってなかったんです」

喜多山と有村の所まで行った。

「同じパーティーの者です。御迷惑をおかけします」

私は周囲の人に言った。人工呼吸をしてくれているのは、慶応大医学部の人だと誰かが教えてくれた。

「どうもすみません」そう言って、私は有村を見た。そこには有村ではない有村がいた。「本当に落ちたんだ!」その時初めて実感した。

「有村!」と声をかけたが返事はない。反応もしない。

人工呼吸を受けている有村の姿を見て、私は有村がもはや私の関与することのできない世界に入りつつあると直観的に思った。そして、このことを早く栗原に知らせないといけないと思い、ザックを置いてV・VIの科尔に走った。

V・VIの科尔に着くと、栗原が丁度降りてきたところだった。「栗原!」私は叫んだ。

「有村が落ちた!」栗原は最初「え?」とわからない様子だったが、

「有村が落ちたよ、やばいんだ」と言うのと、

「本当ですか？落ちたんですか？危ないんですか？」と血相を変えた。私は無言でうなずき、

「今、人工呼吸をしている。でももう俺たちがどうこうできる状態じゃないよ」と言った。

栗原は急ぎ有村の所へ下って行った。私は走って登って来たので息が乱れていたのと、急に体の力が抜けていくような気がして、その場にへたり込んだ。

しばらくそのままボーッとしていたが、呼吸も整い、気持ちも落ち着いてきた。こういう時こそしっかりしなくてはいけない。自分なりにできることをしなければと思って、降り始めた。

途中、A フェースの取り付きに有村と喜多山のザックが置いたままだったので、有村の赤いザックを担いで行った。

私は、今度は喜多山のザックを取りにもう一往復した。戻ってくると、喜多山はトランシーバーで交信をしている。栗原はしゃがみ込んでいた。

有村に対する人工呼吸と心臓マッサージが続けられていた。私は、今夜は熊ノ岩で幕営することはないだろうと思い、今のうちにテントを撤収して置いた方が良さだろうと思った。栗原に「テントを撤収してくる」と言って、長次郎雪溪を渡った。

テントについて、入口を開いて中を覗いた。朝出発した時のままだった。散らかっているテントの中を見ていたら、急に涙が出てきた。

有村は助からないかもしれない。どうしてあんなところで落ちたんだ。あんなにトレーニングしていたのに。あんなに一生懸命だったのに……

涙が止まらなかった。上半身だけテントの中に入った状態で、そのまいうつぶせになっていた。

しばらくそのままにしていたが、また落ち着いてきた。テントを撤収しなくてはいけないと思った。テントの中を少し片付けたが、喉が渇いて仕方がない。テントを出て水場に行って、水を飲んだ。顔も洗った。

テントに戻ると、喜多山が向こうからこちらに雪溪を渡ろうとしている。私も雪溪の方に歩いて行くと、喜多山が虚ろな声で、

「村上さん、有村さんのシュラフとマットを持ってきて貰えますか」と言った。

私はその時、有村が死亡したことを知った。

有村の方を見ると、周りの人達が色々動き始めている。

「わかった、持っていく」私はそう答えてテントに戻り、有村のシュラフとマットをザックに詰めた。

有村は死んでしまったのだ。俺は有村の最期に居合わせてやれなかった。有村の最期を見届けてやれなかったのだ。そう思って胸が締めつけられた。

現場に行くと、有村の遺体はすでに誰かのシュラフに包まれていた。どうやら私が持って来たものは必要なさそうである。栗原は救助活動を手伝ってくれたパーティーの人達に、住所と名前を書いてもらっていた。私と喜多山は、遺体を搬送するためにザイルを固定する作業を手伝った。

栗原と目が合ったが、二人とも無言のまま静かに頷きあった。それ以上にかわす言葉もなかった。

「今日は剣沢の出会いまで降ろして、一旦雪溪に埋める。明日晴れたらヘリコプターで運ぶ。晴れなかったら皆で上げる」

警備隊の人が言った。

搬送の準備ができた。現場から雪溪まで遺体を担いで降ろした。

雪溪について、搬送を行なう人は、それぞれ遺体を固定してあるザイルを持つのだが、私達3人はテントを撤収したいので、先に降ろしていてもらうことにした。

「それじゃ、お願いします。どうも申し訳ありません」

17時30分、搬送が開始されるのを見届けて、熊ノ岩に向かった。

3人になるのは辛かったが、大急ぎで黙々と撤収・パッキングを行なった。隣のテントの人が手伝ってくれた。テントの脇の雪の中に、朝作ったゼリーがあった。別に食べたくもなかったが、折角なので3人で少しずつ食べた。

撤収しながら、事故現場の写真を撮っておいた方が良さだろうということで、栗原がカメラを持って、Aフェースを撮ってきた。

3人で4人分のザックを運ばなくてはならない。私が最初にパッキングを終えたので、有村のザックと2つ担いで雪溪まで歩いた。しかし、2つを担いで下るのは到底無理である。雪溪の上を引きずるように降ろそうと思い、ザイルを出してザックに固定をした。

栗原が来たので手伝ってもらおうと思ったが、早く降りて搬送の人達に追いついた方が良いといふので、栗原は先に下って行った。

喜多山が来たので、2人でザックを引いて行こうとしたが、どうも調子が悪いのでザイルの長さを調整していると喜多山が、

「いろんな技術を知っていますね」

と言った。私は、

「こういう時のための知識だからな」

と答えたが、こんな知識持っていて何にもならない、と思った。こんなことを知っていてそれが何の役に立つというのだ。何だか、非常に空しかった。

私はアイゼンを持っていないため、どうしても喜多山と歩調が合わない。喜多山が、「俺一人で引いて行けますよ」といふので、すまないと思ったが、彼に有村のザックを任せた。

どっと疲れが出てきた。何度か足が滑って、尻もちをついた。辺りはもう薄暗くなっている。

谷はあくまでも静かである。有村が死んでしまったことが、未だに信じられなかった。頭の中はボーッとしていた。

喜多山はずんずん先に降りて行ってしまふ。長い長い、下りだった。私は一人でとほとほと薄暗い雪溪を下っていった。

19時40分、剣沢の出合いで3人が合流。有村はすでに雪溪の下だった。有村のピッケルとザックを添えて、合掌をした。

警備隊の人一人と一緒に剣沢小屋へ向かって雪溪を登った。長い登りだった。21時40分小屋に到着。翌日の打ち合わせをしてから小屋に入り、夕食。就寝。あまりにも長い一日が終わった。

8月3日

快晴。殆ど眠れなかった。朝になり、現実の重さを痛感する。

8時、ヘリコプター到着。栗原と警備隊員で遺体を収容に向かい、8時30分小屋に再び戻り、喜多山と私も乗り込み、剣岳を離れた。

その後、警察の事情聴取を受けて後、上市町の真教寺に向かった。

反省

今回の事故に関して、いくら反省したところで有村君は帰っては来ない。しかし、これから先も山登りを続けるだろうクラブの皆と、私自身のために、そして何より有村君の死を無駄にしないためにも山行を振り返らなければならない。

今回の事故の直接原因は、恐らく有村君自身のミスであった。岩登りは落ちてはいけない。そして万一落ちた時のための備えも万全にしなければならない。彼はこの2点に於いて、同時にミスをした。

有村君は本来そのようなミスを犯す男ではなかった。今回の場合は正しく「油断」であると言えようがない。

その「油断」がどこから生じたものか、有村君自身の責任にしてしまうのは容易い。しかし私は、それ以上に今回のパーティー自体が、そのような「油断」をメンバーに生じさせるような性格を持っていたと考えるのである。

今回のパーティーは、5年生の私と、4年生の有村君・栗原君、2年生の喜多山君の4名からなっていた。そのうち喜多山君を除く3名は、過去に4・5回剣で岩登りをしたことがあった。そして体力・技術・経験ともにクラブの中でも優れていると自負していた。

それ故、今回のパーティーは一種の「放任パーティー」となっていたと言える。他のメンバーに対する「信頼感」が「あいつは放っておいても大丈夫だろう」という妙な形になって現われていた。出発前にメンバーで綿密に打合せをすることもなかったのもその現われだろうし、事前のトレーニングも各自の責任でというようにしていたのも、やはりそこから来ていたのだろう。

また自分の実力を誇大に評価して、「Dフェースは難しいけど、Cフェースは適当に登っても大丈夫だろう」というような意識が、私にもあったし、他のメンバーにも多かれ少なかれあったのではないだろうか。

そして「あいつも大丈夫だし、俺も大丈夫」という楽観的な雰囲気、自分の岩登りだけを考

えているという状態だったと思う。

それが今回のパーティーの長所でもあったのだが、逆に致命的なものにもなった。

岩に取り付く時には細心の注意を払わなくてはならない、ということを頭で判っている、放任的な雰囲気は注意力を知らず散漫させてしまうものだろう。

また私も私自身のことばかり考えていた。当日は早くDフェースに行きたくてうずうずしていた。剣での岩登りは初めてという喜多山君と組んだ、有村君の気持ちを汲んでやることができなかった。

私達が先にDフェースに行ってしまう、当日中に行けそうにない有村君はかなり気落ちしていたのではないかと。それにDフェースの代わりに易しい魚津高ルートに登るということで緊張感もなくなっていたのだろう。

パーティーとして、常に緊張感を保つように努力をしなかったことが悔やまれてならない。

また、事故発生当時現場に居合わせなかったのも、今回の救助活動に積極的に関われなかった。私と栗原君が有村君の墜落を知ったのは事故発生から1時間半あまり経ってからだった。その時点で有村君の心臓はすでに止まってしまう、私は施す術を知らなかった。

しかし事故発生当時現場に居合わせたとしても、自分に適切な処置がとれたかどうかはわからない。私の持っていたのは「知識」だけであり、緊急の場合に実際どれだけ動けるかは甚だ疑問であった。

私に限らず、山登り技術はともすれば「事故を防ぐ」ということに主眼が置かれがちだが、それと同時に「事故が起きたときの処置」もしっかり習得しなければならない。当り前のことだが、私自身それがしっかりできていなかった。

岩登りでは、半端な気持ちで取り付くようなことはしてはいけないのである。言葉で判っているながら、それを実践できなかった今回の山行を悔やみ、そういう私自身を情けなく思う。

そして、友を一人失ってしまったことを厳粛に受けとめ、今回の反省を決して一過性のものにする事なく、より安全な登山をめざしていきたい。

また他の人達に多大なる迷惑をかけたことを、陳謝したい。

これから先も私は山登りを続けるつもりである。より強くなり、よりしっかりと山登りを心がけよう。

有村君の救助を手伝って下さったパーティーの方々、富山県警察山岳警備隊の方々始め、関係各方面の方々に御礼を申し上げます。

そして御遺族の方々に、二度と山での悲しい事故は起こさないことを誓います。

最後になりましたが、有村正君の御冥福を心からお祈り致します。

7
為に
時50
ケー
から
レー
から
の日
太陽
飲み
の日
なの
と言
31E
に決
はカ
約3
寒か
メン
てし
8月
がC
チウ
8月
て4
いた
のも
そ
れる
そこ
で行